

# 空間知覚と時間知覚

## ——「知覚の哲学」試論 その三——

種 村 完 司

(1989年10月12日 受理)

Die Wahrnehmung des Raums und der Zeit

—— Versuch über “die Philosophie der Wahrnehmung” III ——

Kanji TANEMURA

### I. いわゆる空間知覚と時間知覚について

1) 前論で、知覚には事物の空間的・時間的把握が表現されている点について触れたが、「空間」それ自身、「時間」それ自身の知覚については言及しなかった。先の論点を深化させるためにも、いわゆるわれわれの空間知覚、時間知覚について、ここでやや立ちいって論じておくことが適切であろう。

まず、空間についてであるが、これは、伝統的に「距離ないし奥行は直接的に知覚できるか」の問題として論及されてきた。これまでの哲学者の議論にあっては、概して否定的な解答が多い。デカルトやロックでは、延長的空間的性質（位置や大きさや奥行など）は事物の固有の性質だと理解されてはいるが、色や匂いなどの感覚とは異なり、判断や推論の助けをまっしてはじめて知覚されるものとみなされてきた。バークリーでも、距離ないし奥行は、経験にもとづく判断の結果だと主張され、彼方に見える事物までの距離は、途中に介在する対象の多少によって、当の事物が明瞭にあるいはぼんやりと見えるか、大きくあるいは小さく見えるかによって推論されるしかない、といわれる。だが、はたしてそうか。

距離や奥行の知覚にさいして、視覚や触覚などの感覚器官だけでなく、表象機能や知性の推測機能が共同して働き、記憶内に集積された過去の経験も大きな補助的役割をはたしていることは、否定できないように思う。たとえば、私が今坐っている椅子から部屋のドアまでの距離は5メートルほどあり、立ち上がって7、8歩でそこに達しうることを、私は知っている。その短い距離は、はじめ前方のドアを見、こちらの椅子からそこまでの長さを眼で連続的に追いかけ、手前にある作業机や植木鉢までの長さをほぼ正確に推測して、その何倍であるかの見当をつける。そのとき、途中の床の上への、また諸事物への光の当たりぐあい、その結果生じる陰影の程度もこの推測を正確に

するのに役立つし、なにより、毎日部屋の中を往復している自分の行動を想起し、その歩幅を表象することを可能にした日常的な経験も、大いに距離判断を確かなものにしてくれる。

しかし、このことが当てはまるのは、距離や奥行の測定においてであって、距離そのもの、奥行そのものの知覚に関してではない。自らが注視している遠くの対象Aまでどれほどの距離があるか、そのAは、同じように遠方に見える対象Bとどちらがどの程度遠いか、あるいは近いかが問題になる時、それにたいしてよりの確な判断を下そうとすれば、知覚には、表象や知性による比較・推測、過去の経験を貯蔵する記憶などの援助がどうしても必要となるだろう。だが、どんな対象も知覚する主体からなにがしかの距離をもって存在していることは、事物から空間的性質を切りはなしてしまわないかぎり、必ず知覚される。

われわれの知覚野には、さまざまな事物、それらの大きさや形、事物間の空間的配置、それに由来する距離がふくまれている。大きさや形、空間的配置が、正確にとらえられているかどうか、時には歪められていないかどうか、はこの場合どうでもよいことだ。知覚を可能にしている主観的条件と客観的条件のゆえに、たとえ歪んだ知覚世界が成立したとしても、その世界は、大きさや形や空間的配置を欠如させるわけにはいかない。歪んでいようと、その歪んだ空間的諸性質がなければ、世界は現われ出ようがないだろう。

人間の知覚は、一つの事物を他の事物との関係でとらえているし、多くの事物を対象とするとき、事物としての同一性と同時に、輪郭や色彩によるそれらの差異性にも気づいている。この事物間の関係の意識や差異の意識は、そのまま事物の空間的配置の認知でもある。だから知覚は、距離や奥行に関して、一定の直線の端にある点だけを注視しているのではない（パークリーは、距離の一端としての点の知覚しか承認しなかった。ヒュームは、この説を半ば否定し半ば継承している）。知覚にも、思考とは違った意味で、関係や全体が表現されている。知覚に事物のごくささいな個別的認知しか帰属させないのは、知覚にたいする侮辱というものだろう。

ヒュームは、周囲の事物を見回したあと、眼を閉じて知覚された物体間の距離を考察すると、延長観念をうる、と言う。そして彼は、あらゆる観念の源泉を感性的印象に求め、延長観念も、色彩のある点およびその出現様式の模写にほかならない、と結論づけている。「模写」という点が明確にされることによって、延長観念の源泉が客観的実在界に求められていることは、評価されてよい。しかし、感性的知覚は、色彩のある点とその点の布置をとらえるが、点の空間的關係や距離をとらえている、とまでは明示していない。けっきょく、「眼を閉じて」、つまり知覚のあとで、想起や表象にもとづく理知的な考察によって始めて、「空間」や距離の観念が形成される。やはり、距離や広がりそのものは知覚されえない、という立場だ。だが、それは決して真実ではあるまい。空間や距離は、それらが包括する個々の対象とともに直接に知覚されているからこそ、知覚が消失したあとでも、表象として再生され（もちろん、対象の定在と結合して）、それにもとづいて、思考による空間についての抽象と概念化がすすめられうる、というべきなのである。

じっさいのところ、われわれが事物の立体的性格や距離を知覚するための生理的および心理的な

基礎をもっていることが、実証的に確認されている。人間の両眼の間に数センチメートルの距離があり、このことによって右眼と左眼のそれぞれの網膜像は完全には等しくならない。この若干の不一致が、事物の立体性の印象を作り出す。このほかに、眼の調節作用——水晶体の彎曲度の変化——や輻輳作用——対象にむけて両眼の視線をあわせる作用——も、立体性と距離の知覚に寄与をする。さらに、先に述べた事物の表面における光と影の配置や、遠くて視角の小さいものほど小さく見える、という「線の遠近」現象、近いものより遠いものの方が大気の層に影響されてぼんやりと見える、という「大氣的遠近」現象など（実は、これらを、正しくは光と影の配置やコントラストをとらえる能力、「線の遠近」現象や「大氣的遠近」現象を知覚する能力、と言いかえる必要がある）、これらも、距離にたいする直接的なかつ判明な知覚にとって少なくない意義をもっている。

こうした人間に特有の生理的・心理的能力は、空間知覚の端的な原因というべきではなくて、空間知覚が成立するための主観的条件にはかならない<sup>1)</sup>。もちろん、それは必要不可欠な条件ではある。だがそれにもまして、第一義的には、リアルな事物や事物間の空間的關係という客観的条件が存在していなければならず、客観的条件と主観的条件との合致・共同こそが空間知覚を可能にしているのである。

2) ここで、空間、とくに奥行の知覚にさいして、身体の絶大な意義を強調したメルロ＝ポンティの知覚論にふれておこう。

メルロ＝ポンティは、知覚の光景が必ず「方向づけ」されていること、この方向づけは、自らの任務や周囲の状況にもとづいて現に活動している、あるいは活動せんとしている身体に由来すること、それゆえ奥行とは、対象それ自身に属さず、身体を基軸とする展望に属するものであるから、いわば最も「実存的」なものと呼ばれてよいことを主張している。奥行は「志向」であり、「事物なき媒体の厚み」であり、「(世界に) 身を挺している主体の可能性」である、というレトリカルな諸表現も同じ謂いである。

奥行知覚にとって、知覚主体としての身体（メルロ＝ポンティのいう潜勢的身体）がはたす役割の重要性は、たしかに言うまでもない。あらゆる奥行は一定の方向をもち、一つの展望を表わしている。このことは、知覚する身体的位置によって決定されるのであり、従って、起点としての身体の移動は、諸事物の見える側面・相貌の変化をもたらし、事物間の空間的配置をも変容させる。それはまた奥行の「見え」を変化させ、時には新しい奥行を出現させる。奥行の測定、あるいは数量的認知にさいしても、身体は独特の機能をはたすだろう。本棚の奥行は、手の届きうる長さを意味し、部屋の奥行は、自分の歩幅の何歩かによって確認できる広がりであり、遠方にある家は、そこ

---

1) メルロ＝ポンティは、両眼の収斂や見かけの大きさという生理的・心理的事実は奥行知覚の原因ではない、両者は原因—結果の關係に立っているのではなく、動機づけるものと動機づけられるものとの關係に立っている、という。だが、これらの事実は、たしかに原因というにはふさわしくないが、実は本来、人間の心身の能力を指しているのであって、それゆえ、「動機づけ」という心理主義的な規定には解消できない、リアルな主観的条件であることを認めることが大切だ。

に至るのに何十分もかけて歩いてゆかねばならぬ距離を示している。そのとき身体は、奥行測定の基礎的な尺度となり手段となっている。

それだけではない。日常生活や活動の場面で、われわれの身体がどういう状況にあり、どういう課題をもち、何を望み何を望んでいないかによって、奥行はさまざまな意味を帯びて登場してくる(もちろん、これは奥行知覚に限ったことではなく、知覚一般についても妥当する)。脚を怪我して歩行が困難になっている人にとっては、部屋の中のほんの数メートルの奥行とて、絶望的なほどの長さとして現われるだろう。未知の世界の探検に自らの生命を賭している冒険家にとって、熱帯のジャングルの中の道なき道が示している奥行は、不安と恐怖をかりたてると共にやみがたい好奇心を不断にそそるものとして現われることだろう。テニスプレイヤーにとって、テニスコートの奥行は、好調の時にはより広く、不調時にはより狭く感じられ、この身体状況に応じた奥行知覚によってゲームの内容や勝敗がしばしば左右されることにもなるだろう。

このように、身体は、奥行の基点として、奥行測定の尺度や手段として、奥行の意味の主体的条件として、奥行知覚になくはならぬ基軸であり地盤なのだ。そして、この点を明らかにし強調したことが、現象学の、ことにメルロ＝ポンティの功績であったことは十分に承認されてよい。

ところが、メルロ＝ポンティは、各人の奥行知覚の独自性・特殊性を強調した点では正しかったが、しかしそれに固執することによって、はなはだしい主観主義へと傾斜してしまった。先にあげた彼の言葉が示しているように、奥行を私の展望、各人の展望に帰属せしめ、諸事物の空間的な配置や客観的な関係からは分離させてしまうのである。奥行が実存的だとは、事物と私とのつながりが私によって決定されること、私の視点、私の目的や課題、私の期待や意欲によってこそ奥行が形成されることを意味し、奥行が成立するための客観的諸条件の第一義的な存在理由を喪失せしめて、もっぱら奥行の主体的条件を根源的だと宣揚することにほかならない。

だが、奥行とは、単なる「展望」でもなければ、単なる「志向」、単なる「主体の可能性」でもない。それは、ある地点に身をおき、種々の意図と欲動をもつ個体によって知覚された(時には複数の人々や一定の集団によって共通に確認された)、身体と事物との、さらに事物と事物とのリアルな空間的位置関係にほかならない。われわれが事物を知覚するとき、感覚器官や中枢神経系の諸機能に依存するとはいえ、自らの内部の生理的機能の変化や信号、身体内に想定されがちな対象の「知覚像」を知覚するのではなく、まさしく対象である当の事物を知覚する。それと同じように奥行を知覚するとき、主体の機能や意図に依存するとはいえ、自らの展望や奥行イメージを知覚するのではなく、あくまで事物間の客観的な配置や距離を知覚するのだ。

奥行経験に特殊性があるとしても、同時にそこには、リアルな客観的な関係をとらえているという普遍性がなければならない。奥行知覚といえども、もしこういう役割をはたさないなら、すなわち「志向」や「主体の可能性」にとどまる主観的身体的諸条件でしかないのなら、そんな知覚機能は、生物と人間の進化の過程の途上で、とっくに淘汰されふるい落とされていたことだろう。なぜなら、奥行知覚のみならず人間の知覚一般は、人間の行為と生活の中で、それらの切実な目的を実現する

ため機能すべく組織されているのだし、合目的的に行為する上でなくてはならない環境的世界にたいする客観的な認知として、たえず自らを証明しなければならないからである。

3) 空間知覚をめぐる問題だけに少々立ちいりすぎたかもしれない。とはいえ、概括的ながら、主な論点には一応ふれることができた。次に、まだ残されている時間知覚の問題に移ることにしよう。

時間知覚を論ずるとすれば、まず、当の知覚の対象となる「時間」とはそもそも何なのか、という疑問が発生するだろうし、したがって、直ちにそれに答えることを迫られよう。

無生物・生物を問わず、自然的事物の運動・変化にともないかつそのうちに表現される「自然的時間」、人間の感覚・感情・精神活動の推移への内省から生まれる「心理的時間」、ハイデッガーやメルロ＝ポンティが強調した、世界にたいする人間の意味づけや主体的投企によって生成する、脱自としての「実存的時間」など、さまざまな時間理解が可能であろう。これらの中で、何を根源的な時間ないしは時間の本質と考えるかは、論者の哲学的世界観に依存している。そして、まだ明瞭な世界観がない場合でも、それぞれの時間理解の徹底は、必然的に一定の世界観に結びつかざるをえない。

私は、ここでは、いわば論証なき一つの断定にならざるをえないけれども、自然的事物であれ社会的存在であれ、人間によって知覚されうる客観的な事象の運動・変化がもたらす「持続」を根源的時間と考え、その他の時間をこの根源的時間の派生態または様相とみなしておく。われわれの現実生活における時間知覚を問題にすると、唯心論の心理主義的時間論や実存哲学の実存的時間論よりは、知覚しうる対象の継起に注目した経験論的時間論から教えられる方が多い。

ロックは、持続としての時間観念を論じたとき、この観念を提供するものとしては、物体や物体の運動より「印象の継起や心にある観念の系列」だとみなした。これは、物体の運動があまりにも速かったりあまりにも遅かったりする場合には、現実の継起といえども知覚されえないこと、また物体やその運動がなくても、われわれは目ざめている間、心の中に観念をつぎつぎと生むことによって持続を知覚すること、等に注目したからだ。彼自身は、対象の継起を否定してはいないし、実在するものを欠いた持続を想定することに反対はしている。だがそれにしても、根源的な諸事物の継起より派生的な印象や観念の継起に力点をおくことによって、いぜんとして経験論特有の狭隘さのうちに身をおいていたことは否めない。ヒュームは、以上のロックの時間規定をうけつぎながら、対象の継起と切りはなされて時間が出現できぬことを強調し、「可変的对象の、しかも知覚できる継起」によって時間が発見されると説明した。ヒュームにも、もちろん時間を客観的実在の存在様式とする唯物論的見地がうち出されているわけではないが、ロックより「対象の継起」の観点がいつそう明確におし出されている点は評価されてよい。

時間というものを以上のように理解するとして、では、この時間を現実の場面でわれわれはどのように知覚しているのだろうか。

たとえば、ある夏の午後、私が暑さを避けて一本の木立の下にいるとき、たまたまその幹にと

まっていた一匹の蟬が突然なき始めたとしよう。蟬のかん高いなき声がしばらくの間(時計で測れば2分ほどの時間)私の耳を刺激し、そしてぱったり止んでしまう。ほんの少時の静寂(これも時計で測れば10秒ほどの間隔)のあと、前と同じつんざくような声が私の耳に届いてくる。こうした場合、私は、なっている蟬を知覚し、その蟬の独特の声を知覚するだけでなく、声の持続とその一定の間隔をも知覚する。しかも、なき声というリアルなものの一一定の持続だけではない。この声の欠如、つまり静寂ないし沈黙の持続をも知覚したのである。(もっとも、声や音なくして静寂はありえないから、無の持続を独立に主張すべきではない。静寂もある一定の対象の欠如であるから、この対象を前提する以上、「欠けている対象の持続」といってさしつかえないだろう。)私の聴覚は、この声の持続と静寂の持続とがどれくらいの間隔をもっていたかを正確には測定できないにせよ、これらの持続が現に存在し、しかも確実に一定の幅をもっていたことを知覚している。この意味で、対象の一定の持続としての時間は、われわれの知覚の中でまちがいに捉えられている、といっよい。

さらに、別の例をあげると、私の視野の領域内で、一つのボールが、ある速度でAの位置からBの位置へ転がったとしよう(一台の自動車が、時速数十キロの速度で、ある長さをもった大通りの端から端まで走りぬけるのを、私が遠くから見たときにも同じことがいえる)。この場合でも、転がっているボール、このボールの速さ、さらにボールが移動した距離を知覚するだけでなく、このボールの運動そのものの持続とその一定の幅をも同時に知覚する。もちろん、ロックが言うように、この運動があまりに速すぎたりする場合、継起ないし持続の印象をもちえないことはたしかだが、これ以外の速さであれば、また、視野に障害がなく、意識統一に混濁や断絶がなければ、運動は必ずや持続として知覚されうるだろう。

上のような力学的運動にとどまらず、物体の形や大きさの変化、化学的な変化、さらに有機体の生成・発展・消滅のうちにも、持続を知覚しうることは疑いない。気候や熱の変化によって氷が融け木が燃え、化合によって特定の物質の性質や色彩が変化し、一定の条件のもとで植物が発芽し開花し、枯死したりするとき、そこには、さまざまな事象の変化を貫いて、必然的に客観的な持続が生み出されているからである。もちろんこれにつけ加えて、われわれ自身の知情意などの精神的作用(ないし心理現象)に対する内省を通じて、持続の表象がえられることもまちがいない。それは、観念の継起を重視したロックの言う通りだ。

4) そうしてみると、持続の知覚は、多種多様な事物の運動、現象の変移、作用や過程についての知覚、一言でいえば「運動の知覚」なるものと密接不可分であることが知られよう。運動がなければ、事象の継起は生まれぬ。運動とは、必ず事象の量、質、関係の、いずれかの変化であり、またはそれらの複合の変化である。化学的作用や生体の活動は、例外なく当該事物の量の増減や新しい質的变化をひきおこすが、事物の量や質の変化をもたらさない位置移動のような力学的運動でさえ、空間的配置ないし他の事物との関係の変化を必ずひきおこす。「継起」とは、こうした変化を

